

図 17b 長台関楚簡(戦国)



出典：『文物参考資料』1957年9期，p.27。

も、その後書体に変化が生じてくる。その主要な点は、石鼓文(図19)に見られるように字形が方正化に向かい、全体としてバランスのとれた形をとるようになることである。この時期の東方列国の文字が長体へと変化していくのとは極めて対照的で、この点は列国の文字と明確に区別される大きな特徴である。しかもこの傾向は、詛楚文(図20)にも見られるように戦国期にも受け継がれ、かつ戦国期になるとこれに筆画の簡略化が加わって、小篆と呼ばれる正体字の書体が形成されてくるのである。もちろん、秦においても日常使用する文字は正体字を改造して使用し、そこから秦の俗体字が生まれて隷書の基礎となるのであるが、それについては後述する。

秦の始皇帝は前221年に天下を平定すると、統一政

図 18 楚帛書(模本; 戦国)



出典：林巳奈夫「長沙出土戦国帛書考」『東方学報』第36冊(京都, 1964)

策を遂行する必要から文字の統一に着手した。その方法は当時の秦の正体字である小篆を整理して標準の書体を作り、これを統一文字として全国に普及せしめたのである。その整理と統一の任に当たったのが李斯であった。始皇帝が巡幸の際に各地に立てた李斯の手になる小篆の頌徳碑(図27)は、言うなれば統一文字のテキストでもあった。

なお、漢代に入って隷書が小篆にかわって主要な書体となってくると、小篆は主に印章や金石に刻鑄される古い書体となっていた。

【隷楷段階の漢字】 漢字の書体の変遷で、古文字段階に続くのは隷楷段階である。隷楷段階は、1) 隷書の形成、2) 隷書から楷書・行書への2段に分けて考察する。

1) 隷書の形成 秦の文字の中にも正体字のみならず俗体字のあったことは先に述べておいたが、その早い例としては秦の孝公時代の銅器の銘文で、孝公18年(前344)の商鞅量は正体字であるが、同16年(前346)の商鞅矛(図28)は明らかに俗体字である。以後、文字の使用頻度が増すにつれて俗体字も流行してゆき、それは銅器では主として兵器の銘文、漆器の銘文、さらには鈇印や陶文の中にさえも及んでいる。篆書特有の円転の筆法ではなく、むしろ方折の筆法に近い俗体字の中には、すでに隷書の要素を見ることができ

そして、雲夢睡虎地11号墓の竹簡(図26a)では、